

水は清ふして甚重し、此類重きとて悪きにあらず、長流水輕しとて好にもあらず、水は只輕重にて定むべからず、只口に合てよき味あるものよし、鹹あり、金氣あり、土氣あり、澁き味ある等のもの悪し、只かるく甘き水好水也、又按に點茶家者流の定むる所は、只水の分量のみ、輕重の間にはあるまじ、點茶は末茶の多少にて、水も多少の分量を汲は、これのみの用か、猶考べし、  
 遵生八牋曰、源泉必重、而泉之佳者、尤重餘杭、徐隱翁嘗爲余言、以鳳凰山泉較阿姥墩百花泉、便不及五泉、可見仙源之勝矣、この説にて按るに、地中石間より出る活水は重く、長流のものは水こなれかるし、まかれれば重きが惡しきにもあらず、輕きが極てよしとも定がたし、初めに論るがごとし、

水輕重考

金城中黃金水二十目 淀川水四十九分 冽寒泉二十目五分 有馬湯山一ノ湯用水廿一分三分  
 五 有馬鷹塚清水廿一分六分 石 龜尾瀑水廿一分五分 舟坂清水有馬道極 宗悟川水名水と  
 川東小川舟 瑞寶寺水有馬京口也、用 同所瀑泉廿一分五分 大坂愛宕水廿一分 合坂水大坂天王寺西  
 坂二ハ不 及 難波柳水 京下河原菊水 京杜鵑井 加茂手濯水 明星水  
 在栖清水同所清 水寺下

此外本朝國志郡志に擧る所の名水多し、其方角に在す人は、自ら試み用んも、博物の一つならんのみ、

〔清風瑣言〕下辨水

熊明遇の茶記に、茶を煮るは、水の功十の六に有と云り、○中 江水は中流の人氣遠きを汲べし、井者、汲事多きを宜しと云り、是大統の論也、山水にも石池乳泉にして涌あふれざるは、陰氣を蓄ひて色鮮明ならず、或は淺縹に、或は微黒に、或者崖間樹蔭なるは、常に毒蟲なども住て潔からず、水味輕甘なりとも佳品とせず、江河長流は、汚穢流るれども、蕩々として其氣の停る所なく、味は甘重にて且無毒也、但煮て茶に青色を出さず、山泉に劣る所也、井水は汲事多くとも、泥土或は海潮